

総括

高島 元洋

第四回 国際日本学シンポジウム「国際日本学との邂逅」の分科会3は「日本人の心―日本的宗教性の諸相」というテーマで開催された。本分科会は、本学・頼住光子助教授がコーディネーターとして、次のような問題提起で企画された。

「日本思想の成立と展開を考える上で宗教の果たした役割は大きい。しかし、従来の研究は、教理研究・教団史の研究を重視するなど、宗教の本当の動きを捉えるものではなかった。教義や教団という形で可視的に定型化され枠付けられた「宗教」を超えて、不定型な、しかし、われわれの不透明な生を根底において支える「宗教性」について従来の宗教研究では扱いきれないものがあるのではないか」（要旨）。

ここで頼住助教授のいう「宗教性」ということが問題であろう。われわれの学問は、すでに江戸時代から近現代の今日にかけて、さまざまな分類を思想・宗教に適用してきた。宗教であれば、神道とか仏教と分けて理解し、さらにその中に派生するものをたとえば真言宗・天台宗・浄土宗というように宗派に分けて受け止めてきた。しかし、「宗教」の本当の力は、このような分類以前の所にあるのではない。分類を超え、日本人という枠組みを超え、なお動くプリミティブな衝動があり、これが「宗教性」ということばで表わされる。おそらく、これは人間一般の宗教的なものを求める心の動きなのであろう。

この「宗教性」を検討するため、今回は国際的学際的な試みとして次のような多彩な方々にご報告をお願いした。

- ・都瑠淳「韓日古代神話の思想性の比較」（韓国・東方学研究所所長）
- ・柴佳世乃「法華経の音声―宗教と芸道」（千葉大学）
- ・ウィリアムズ・ダンカン「癒やしと浄め―日本宗教と温泉文化」（カリフォルニア州立大学）
- ・大久保紀子「稲葉黙齋における喪礼の意味」（お茶の水女子大学教務補佐）
- ・フランツ・ヒンターエーダー||エムテ「近代の影―宗教をめぐる漱石の懐疑とア

イデンティティ」（山口大学）

たとえば宗教的要素としての水・お湯・温泉あるいは音・声は、いうまでもなく日本文化にのみ特有のものではない。類似するものは、世界のさまざまな文化に容易に見いだすことができる。それらを比較することで、われわれは日本の宗教・文化を相対化し、宗教的要素そのものをそれ自体として理解する手がかりを得ることができる。今回の試みは、そのような意味での「宗教性」を探る機会であった。このような操作を積み重ねることがこれから必要になるであろう。

またその際、考えておくべきことは比較することの意味である。たとえば類似するものを比較して異なる場合、どちらの文化がすぐれているかというような分析は、おそらくあまり意味がない。異なる事象を前にして考えるべきことは、比較した社会の相互の違いであろう。学問は、いうまでもなく客観的でなくてはならない。イデオロギッシュな方法では、共同して比較をすすめるような研究は不可能であろう。